元田作之進（一）

寺崎昌男

一

今後二～三号にわたって、元田作之進（一八六二＝文久二～一九二八＝昭和三）に関して小さな評伝を試みたい。

それにしても「元田作之進」は、キリスト教史を除く日本近代史上で、あまり重視されている名ではない。一方、近代教育史や宗教教育史上は無視できない人物であるはずだが、そこでも大きく取り上げられることは少ない。キリスト教史の上ではもちろん重要人物の一人として扱われてきたものの、多数の日本人・外国人のキリスト者・宗教教育家と比べれば、やはり広く知られているとは言えない。

しかし、立教学院・立教大学にとっては明治以来有数の指導者・功労者であった。明治期の立教学院を整備・擁護・拡大し、さらに日本人初の聖公会主教として献身し、布教活動のさなか、一九二七（昭和三）年に逝去した。

逝去直後には山縣雄杜三（基督教週報主筆）、多川幾造（日本聖公会聖職）、杉浦貞二郎（立教大学第二代学長）石井筆子（滝乃川学園）その他の人々が追悼文や小伝を書き[1]、引き続く数号でも、多くの人々が追悼文を書いた。戦後には高瀬恒徳（日本聖公会元主教）、伊澤平八郎（元立教大学図書館員）、伊藤俊太郎（立教中学校元教諭）、大江満（学院史資料センター研究員）の諸氏が伝記を発表している[2]。また最近では、西原廉太氏（文学部キリスト教学科教授）によって、元田の言説について思想史検討を発表されている[3]。

他方、元田は生まれ故郷である久留米市（福岡県）では「立志伝中の人」として扱われ、いくつかの貴重な小伝が著されている。筆者は、幸い久留米市に収集・保存されている文献・資料を検索することができ、従来の伝記研究をやや補うことができた[4]。久留米所在の文献を含め、多くの伝記が依拠しているのは、元田自身の自伝の形を取る『元田家系譜』[5]である。

本稿では、前記のような学院内外の研究蓄積に依拠しながら、久留米の文献・資料の助けを借りつつ人物の素描と評伝を試みたい。

筆者が主として依拠したのは、前記大江満氏執筆による『日本歴史人物事典』中の項目「元田作之進」である。客観的かつ正確なこの項目の記述を逐次紹介して読者の

方々に略伝を理解していただき、それに順次補遺や増補等を加えていくという形で記すことにする。

以下、元田については敬称を略した。大江氏の記述については「大江項目」と記す。

二

出生から受洗までについて、「大江項目」には次のように記されている。

「明治大正期の牧師・教育者。日本聖公会初代邦人主教、立教大学初代学長。久留米藩士の長男として生まれるが幼児期に両親と死別。苦学し、明治八（一八七五）年、久留米師範学校に入学、最年少で第一回卒業生となり十六歳で小学校校長となる。中学校教員を経て同十四（一八八一）年米国聖公会ST.S. ティングの大阪英和学舎に学び、翌年受洗」。

元田作之進の出身の久留米藩は、九州北部・筑後国の半分を領有した大藩（禄高二十一万石）の一つであった。藩主有馬家の居城・篠山城を巡る城下町が、現在の久留米市である。福岡県の南端、佐賀県との境にある。両県の間を有明海に向かって流れるのが筑紫二郎と呼ばれる九州第一の大河、筑後川である。外様大名の一人、有馬氏がここへ移封されたのは一七世紀であったが、以後明治維新まで一一代約二五〇年にわたってこの地を治めた[6]。

作之進の生まれた元田家は父祖の時代には馬廻組を勤め、のち代々郡奉行を勤める名家の一つであったらしい。作之進の九代前までさかのぼることができるという。生まれたのは城郭内の篠山町だったというから、上級武士の子として生を受けたことになる。

父は元田佐市次季（次孝という記録もある）と言ったが、その次季は作之進誕生の翌年に、また母フジは、その翌一八六四年、作之進三歳弱のときに世を去った。

作之進は、幼くして両親を失った。彼の上には五名の姉があり、その次女駒代のもとには、養嗣子として佐一が迎えられていた。そこで幼児作之進は、その姉夫婦の子という形で養育されることとなった。佐一は二一歳、姉駒代は一六歳という若さだったという。

なお、作之進の諱は次春、後に号を良山とした。

実は、作之進が生を受けた文久年間から維新を経て廃藩置県（一八七一年）あたりまで、久留米藩内には佐幕・勤王・攘夷を巡る激しく陰惨な確執があった[7]。その思想的バックグラウンドは、何らかのルートで作之進の考え方に影響を与えたに違いないと思われるが、今は立ち入るだけの資料はない。全体の末尾で改めて触れることにしよう。

さて幼少のころ、あるいは少年のころの作之進につい

て、彼自身あるいは周囲の人物が語っているところは少ない。ただ、彼が数え年六歳で維新を迎え、その翌年七歳のとき市中に移転した前後の生活について、多くの伝記が引用しているのは、『元田家系譜』に記された次の一節である。

「〔明治七年の〕頃ヨリ家運漸ク傾キ、郡奉行ノ家トシテ名声高カリシモノガ、今ハ殆ンド零落ノ家族トナリ、作之進ハ通学ノ余暇ニハ義弟ノ守リ、買物ノ使ヒ、草取リ、拭キ掃除、年尚幼ニシテ米搗キ、薪割リヲ命ゼラレ、学課ノ予習、復習ニハ殆ンド時間ヲ得ル能ハザリキ」。

文中「義弟」とあるのは姉駒代夫妻の子、実は彼の甥に当たる幼児であろう。このころ彼が通ったのは、寛政時代に市中に開かれた藩校明善堂跡につくられた、明善小学校であった。

これより先、元田家は右記のようにいったん市中のかつて中級武士が住んでいた町（日吉町）に移り、作之進はそこから明善小学校に通学していたようであるが、その家は売却されて、高良山麓に近い農村地域に移り、「少許ノ田畝ヲ求メ其処ニ転居シテ士族生活ヨリ田園生活ニ移レリ」という状態になる。つまり姉夫婦は、家禄を離れた士族たちに典型的な、農業への家業転換、そして貧窮生活に移ったのだった。

だが、このころ、作之進自身の生活には大きな変化が訪れる。それは「大江項目」にあるように「久留米師範学校」が建設されたことであった。

三

一八七五（明治八）年、作之進は「久留米師範学校」に入学する。ただし、この学校の正式名称は「第九中学区内久留米　小学教師伝習学校」というものだった[8]。

先にも触れたように、かつて久留米藩には寛政時代以来、藩校明善堂が建てられていた。その跡地につくられていた小学校を廃止して、代わりに建てられたのがこの伝習所である。あわせて、かつては隣藩であった柳河藩にも同種の伝習学校がつくられた。小学校教員養成のみを目的とする修学年限二年の教育機関であり、その役割は、一八八六（明治一九）年以後、勅令師範学校令により全国につくられた「師範学校」と同じである。

その第一期生として作之進は入学した。年齢わずか一三歳であった。

ここで二つの注を付けておこう。

第一は、この学校が生まれた背景である。

三年前の一八七二（明治五）年、太政官は長文の布達である「学制」を発布した。それは維新以後の日本における最初の総合的法令だったが、その中に大々的に掲げ

られたのが「国民皆学」の方針であり、それを実現するための小学校の普及が最優先の急務だった。しかしそのためには教授者としての教師の存在が不可欠である。こうして「教師教導場」の建設は新政府にとって第二の優先性をもつ事業になった。久留米と柳河の伝習学校は、まさにこの方針が遙か九州筑後の国に及んできたことを示しているが、このころそれこそ全国各地に「小学教師講習所」「小学師範学校」等々さまざまな名称の教員養成所あるいは講習所がつくられていた(9)。

第二に、大江項目にある「最年少」での卒業、そして一六歳での校長経験という事実について見よう。

実は同様の例がこの時代各地にあった(9)。次々に新設される小学校に対して教師が圧倒的に不足していたからである。だが、規則では、久留米・柳河伝習学校の入学資格は、「十八歳以上三十五歳ヲ限リトス」というものだった。作之進入学の一三歳と大きく異なる。ただし、右の資格要件には、例外規定が付けられていた。

「学力抜群・品行高尚ノ者ハ十八歳未満ト雖モ此限ニ非ラス」（第二条二項）

作之進少年はおそらくこの例外条項に合致したのであろう。それは彼の小学校での成績が尋常なものではなかったことを語っている。

三年後の一八七七（明治一〇）年、彼は卒業して免許状を得た。一五歳八ヶ月である。その翌七八年九月から市中の山川小学校で教鞭を執り、次いで校長になったのは一六歳一ヶ月のときで、四名の助教員、一二〇名の子どもを預かったという。この足どりも、彼の学才を語っている。次いで一八八〇（明治一三）年、同じ管内の甘木にあった中学校の教師に転じた。

仮にそのまま進めば、後に初・中等教育が大いに普及した筑後地方で有数の教育家が生まれたことであろう。故郷の教育史資料の中に山川小学校ないしは元田作之進校長関係の資料は残っていないようであるが、何しろ教育界に新しい人材が足りなかった時代である。右のような事態が生まれても決しておかしくなかった。しかし作之進はその道を選ばなかった。

教職についてから六年後の一八八一（明治一四）年、作之進は、職を辞して大阪へのぼる。勉強して大成したい、というのが願いであった。

四

作之進の生涯の次のステージは、入信とアメリカ留学であった。

しかしこの時期の元田作之進関連の経歴そのものについては、先掲の『元田家系譜』に詳しく記されており、また戦後の記述としては、高瀬恒徳氏による「良山　元

田作之進先生」が詳細である。ただし留学関係の資料の発掘は今後の課題であるが、現在特に付け加えるべきことはない。

ちなみに、高瀬氏が題名に付している「良山」とは先に触れたように作之進の雅号である。それは彼の故郷久留米の東方にある高良山の別称であった。高良山は耳納山系の西端にある美しい山で、頂上には地元の人々が尊崇する高良神社がある。

さて、便宜のため、上阪、一時帰郷、上阪、留学という以後五年間の作之進のライフコースを年表風に摘録しておこう。以下のようになる。

一八八一（明治一四）甘木中学辞職。権藤直を頼って上阪、馬場健の塾に入る

郷里の先輩堀江義尊に会い、川口英和学舎長T．S．ティング師へ紹介される。英語を勉強。

一八八二（明治一五）大阪川口英和学舎に入り、「学僕」を五か月勤めたのち貸費生。

降誕祭にティング師より受洗。

一八八三（明治一六）塾生投票により英和学舎塾長となる。

――このころ留学の志を得ていったん筑後へ帰国。福岡県小郡（おごおり）小学校校長を勤める。

一八八五（明治一八）春、上阪。ティング師に留学の意向を伝える。

一八八六（明治一九年）七月、ティング師とともに米国に向かう。

元田の帰国は一八九五（明治二八）年九月のことである。一〇年に及ぶ留学であった。この間の学習については、稿を改めたい。

また右の年表に出てくるT．S．ティング、権藤直、馬場健、堀江義尊等の人物研究も今後の課題である。

（続く）

註

(1) 山縣雄社三「我が社の元田先生」、多川幾造「故元田監督を偲ぶ」、杉浦貞二郎「淋しかりし元田監督」、その他の追憶・小伝が『基督教週報』第五六巻第八号（一九二八年四月二七日刊）に掲載されている。

(2) 高瀬恒徳「良山　元田作之進先生」（立教人物列伝㈡『立教』一四号、一九五九年九月）、同「元田作之進」日本聖公会歴史編集委員会編『あかしびとたち』日本聖公会出版事業部、一九七四年、伊澤平八郎「もとださくのしん」（日本基督教団出版局、一九八六年）、伊藤俊太郎「元田作之進」（『立教中学校』一九九五年三月）、同、「元田作之進」『日本キリスト教歴史大事典』教文館、一九八八年、大江満「元田作之進」（『日本歴史人物事典』朝日新聞社、一九九四年）。

(3) 西原廉太「元田作之進と天皇制国家」、老川慶喜・前田一男編『ミッ

ション・スクールと戦争』に所収。二〇〇八年、東信堂

(4) 杉本勝次「元田作之進」久留米市編刊『先人の面影』一九六一年刊、久留米市役所編刊『久留米市誌』一九三二年刊など多数。

(5) 原本は久留米市立図書館蔵。

(6) 児玉幸多・北島正元編『藩史総覧』一九七七年、新人物往来社。

(7) フィクションとしたものに谷川健一『最後の攘夷党―明治四年反政府事件記』(一九六六年、三一書房)がある。

(8) 「小学教師伝習学校規則」(『久留米市史』第一〇巻、資料編(近代)(久留米市史へんさん委員会、一九九六年)。

(9) 中内敏夫他編『教員養成の歴史と構造』(日本の教師六、明治図書、一九七四年)。

謝辞

元田関係伝記資料等の検索に当たっては、久留米市立図書館および立教学院史資料センターの方々にひとかたならずお世話になった。あつくお礼を申し上げる。